



巻頭特集

## 「東から」銀幕に親しむ 父の遺志継ぐ映画館

戦後間もなくの時期から、塩尻の地に根差して営業を続けてきた映画館があります。「東座」。平成最後の年にあっても、昭和の雰囲気の色濃く残す佇まいで観客を待っています。オーナーは、映画コラムニストとしても知られる合木こずえさん。広い知見を生かして上映会を開くなど、独自の取り組みがファンの心をつかんでいます。今回は、東座とともに駆け抜けてきた波乱万丈の半生をたどります。



こうき  
オーナーの合木こずえさん



昔の椅子にはドリンクホルダーがないので現在調整中みたいです



レトロな空間の待合室



懐かしい映画館のチケット売り場



### 父親から受け継いだ灯火 交わした「契約」は今もなお

24年目に突入したフロムイースト上映会ですが、実現までには紆余曲折がありました。そもそも合木さんには、東京で勤務していた時期もいつか東座に戻ることが頭の片隅にあったといいます。「父からは長女として継ぐように言われていました。後になってから『単体の小屋が潤う時代じゃないから継がなくていい』と言いはじめましたけど、今さら何を言っているのか」と苦笑交じりに振り返ります。

そして1995年、東座に戻ってきた合木さんは独自の上映会を思い立ちました。ちょうど日本映画生誕100年の節目で、合木さんにスポットを当てたドキュメンタリー番組の制作に際して企画。「東座から」豊饒な映画文化を発信していく——という気概を込めて「フロムイースト上映会」と名付けました。96年1月放映となった「101年目の映画へ」と題されたその番組は、上映会の初回開催までに密着した内容。塩尻市出身の古厩智之監督による「この窓は君のもの」の上映が満員の観客で埋まって大団円を迎えました。

実現にあたって最大の難関が、当時のオーナーである父親の猛反対でした。それもそのはず。ただでさえ映画が大衆娯楽の代名詞ではなくなったうえ、シネコンに押されている時期。「商売にならない」という主張はもつともです。

そこで合木さんはレイトショーの時間帯に限ること、貸館料を支払うことなどを条件に頼み込んで許可を得ました。「意地でも払ってきました。でもお客さんが1人でも来てくれれば、お金の苦労は頭から消えるんですよ」。そう語る口ぶりは、自然と熱を帯びます。



### 広い知見と経験を生かした 「フロムイースト上映会」

単なるレトロな映画館、ではありません。上映するのは、合木さんがセレクトした珠玉の映画たち。長野県内では見る機会に恵まれない単館系の作品ばかりです。合木さんは1959年出生まれ。東座とともに育ち、高校卒業後は銀幕の世界に憧れて東京の大学に進学しました。その後は劇団の養成所で演技を磨いていきましたが「大きな役はつかめなかったし、芸能界の空気が合いませんでした」と、不安を感じてその道を辞めることにしました。その後は「見られるプロ」から「観るプロ」に転身し、海外のテレビ番組を扱う東京の代理店に13年間勤務。もともと好奇心旺盛な合木さんが日々数多くの映像作品に触れることで、自然と「観る眼は養われていきました。「これだ!」と思うものを見つけたのが楽しいんです。今でも試写状が届くといっても立っってもいられなくなるし、冒頭の10分で判断できるだけの選択眼は持っているつもりです」。その確かな知見が、東座をオンリーワンの存在にしています。

中でも毎月1〜2週間開かれる「フロムイースト上映会」には、特段の思い入れがあります。単に映画を上映するだけではなく、事前に合木さんがポイントなどを解説。「それを聴いてからご覧になると、いっそう映画を楽しめると思います」と話してくれました。

フロムイースト上映会以外の日中の興行作品の中でも、合木さんが「これぞ」と思った作品には講演会をセッティングすることも。広い交友関係を生かして映画の題材についての専門家を招いており、「背景にある歴史や詳細の情報を説明してもらえば、より一層、映画を深く豊かに味わうことができます」といいます。

7年前に父が亡くなって自身が受け継いで以降も、「天国の父が見張っているので(笑)」と貸館料の支払いは続けています。東座は1922年に芝居小屋としてスタート。54年に父・茂夫さんがオーナーに就いてから今に至るまで銀幕への入口となってきました。「映画は同じ作品を何回観ても新しい発見があるものです。作品と1対1で向き合つと、自分の中の知らない自分に出会って感情を揺さぶられます」と合木さん。父娘2代と家族の情熱が詰まった建物に足を踏み入れると、そこには新しい世界が広がっているのです。



待合室にはおすすめ映画をコルクボードで紹介



映写室には現在の映写機と昔の映写機が混在



外には合木さんおすすめのフロムイーストの紹介も